

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	続感情教育待望論（その11）：子どものけんか
Author(s)	上原, 輝男
Citation	児童の言語生態研究, 17 : 2 - 7
Issue Date	2009-07-10
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045202">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045202</a>
Right	
Relation	



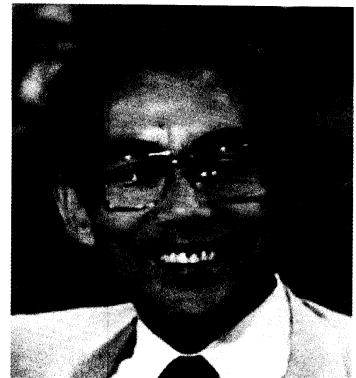
# 続 感情教育待望論

## その11

# 子どものけんか

元玉川大学教授

上原 輝 男



アナウンサー(以下アナ) 今日はこちらの

けんかにつきまして二年がかりで行いましたアンケート調査の結果が、先ほど、玉川大学の中にあります児童の言語生能研究会でまとめられました。この子どものけんかについての調査というのは、東京、福岡など4都県、8つの小学校1611人の児童を対象にしたものであります。研究会の会員であります先生方が合同で行ったものなんです。今日は、主宰者であります玉川大学教授の上原先生に、近頃の子どもとけんかにつきましてお話をうかがってみます。上原先生、今回、子どものけんかについての調査をなさったわけですが、これはもう大分前から先生は決めていらした訳ですね。

上原 私どもの研究会は児童の言語生能研究

会といえますけれども、子どもの言葉の研究なんですけれども、子どものしぐさとか身振りだとか、そういうものと重なり合って言葉は発達していくんだ、つまり生き様ですね。その生き様の研究と合わさって行かなければ、本当の言葉の研究とは言えないんじゃないか、ということから始めている研究会なんです。そこで最初から子どものけんかについての成長ぶりを一番示してくれるまたとないことを早くやりたい早くやりたいと思っただけです。なかなかけんかのことを調査するというのは大変ですね。けんかだっということを聞きつけて駆けつけても、もう終わったりしてね。カメラを持って走っていつ

たり、テープを持っていつたりなかなか大変でしたね。ですから、12年以上も歳月をかけてしまったわけですが、やっぱり変化するんですね。6年生まで、やっぱり変化するんですね。アナ 具体的にはどういうふうに変化するんですか。

上原 アンケート調査とは別に、日頃、子どもたちの日常的な言葉を何年も採録しているわけなんです。十何年も。そういう分を合わせまして、65項目のアンケートを作りまして、さらに、けんかについての作文なんかも資料にしたわけです。

アナ けんかというのは昔と今とでは大きく変化していると言えませんか。

上原 今日はこれだけは何としても言うておきたいと思うことは、今回の調査を仕上げま

して、うん、これは本当に大人たちは真剣に考えなくてはいけないことがあるのではないかと、と思えることがあるわけです。それは、もはやけんかが子どもたちから失われているのではないかと、と思えることがあるわけです。私も小さい頃には、ケンカの最中に、「助けて」なんて言わなかったんですけれどね。ところが今回の調査では、「助けて」なんていうのはさらに出てくるわけです。

**アナ** それは小学校の低学年でも高学年でも出てくるわけですね。

**上原** これはやっぱり重大問題としていいのではないかと思いますし、それから昔あった言葉で、今の子どもたちが絶対使わなくなっている言葉があるということが分かったりしているんです。それは「降参」ですよ。降参する、もう降参だつていう。昔は相手にかなわないとみると降参だつて言ったんですよ。それが無いんですよ。けんかという生活があるつていうことをかつての日本人は知っていたんですよ。特に子どもたちにとつては、けんかにはさせなければならぬんだというところをかつての日本人は知っていたと思うんですよ。そのいい諺が「子どものけんかに親は出ない」というのが本来であるから、子

どものけんかに親が出たと言つて、あざ笑つたんですよ。ということ、子どもは大いにけんかをさせなくつちやいけなと思うんですよ。私どもの子どもの時には、けんかして負けて涙を流して帰つてくると、親はうちに入れてくれないということがあつたわけですよ。なんだ、けんかなんかになんか負けやがつて。そういつてけしかけられたものですね。

ところが今では、けんかはいけないつていうようなことですね、やるうにも最初から否定されているわけです。つまり、けんかは暴力だつて言う考え方が非常に行きわたつていっているわけですよ。ということは、暴力追放ということが行き過ぎたんですよ。

**アナ** そうしますと、先生のなさつたアンケートでは、低学年から高学年までの子どもたちは、「けんかはいけないもの」つていうふうに判断している訳ですね。

**上原** そりや、もう、絶対いけないつていうことを知つていんですよ。知つていてなおかつ、やるつていんですよ。知つていてですね。頭から覚えさせられてしまつたんですよ。だから、私が言いたいのは、けんかが子どもの生活から奪われてしまつたんだということですね。それから、けんかは遊びであつたんですよ。同種同類の動物はけんかしますけれども、殺し合ひはできないんですよ。だから、人間もちゃんとそれを知つていたんで

すよ。だから、大丈夫だつて思つていたし。じゃ、けんかで何を楽しんでたかつて言うところ、ここで下がつては男がすたるとか、それでは男の一分が立たないとか、ということでもつてけんかしていたんですよ。つまり、男を磨いていたんですよ。そういうものが奪われてしまつていてですね、それに実際あぶなくつてしようがないんですよ。今の子どもはけんかを見てると。例えばとび蹴りとかプロレスの真似ですね。それで蹴られたほうが床にたたきつけられてですね、えーん、と泣く。けがをするとか、泣いて起きだすとか、というのが今のけんかなんですよ。つまり、けんかにゆとりが無いんですよ。

**アナ** 先生、けんかは昔と違つてきて、ほんとに危機だつておっしゃいましたけど、アンケート結果からですね、どういつたことが一番特徴的なことが出てきて、これからどういつたことが必要かつていうことを伺いたいんですよ。

**上原** 一番言えることではつきりしたことはですね、被害者意識ばかりが見えるんですよ。自分はけんかにやられた、けんかでぶたれた、といつた、自分のことは包み隠さず述べる子がいるんですよ。ところが、おれはあいつをなぐつてやつた、けとばしてやつたとかですね、そういつたことは言わないんですよ。つまり調査結果から言うところ、今の子ども

たちはきわめて卑怯だということですよ  
ね。

**アナ** 例えば、ぶつとかかむとかいったこと  
についてはどうなんですか。

**上原** 一番特殊な例を言いますとね、つばを  
吐くって言う。これはやっぱり不思議なんで  
すね。やるんですよ。低学年は。つばはたい  
して武器にはならないとおもうんですけど  
ね。ところがこれは、早く終わるんですね。  
これは幼稚だからっていうことなんです  
ね。つばを吐いたり、髪の毛を引つぱりするこ  
とはみつともない、ということにやつぱり気  
がつくんだと思うんです。高学年あたりでは  
こういうことはやらないんです。しかし、こ  
の例だって昔と比べるとこれも増えているん  
です。かつては、そういうことをするのは女  
の子に限っていたんですよ。そういうことを  
するのは。ところが今は、男女の区別、男女  
意識が希薄になってきているっていうこと  
ですね。それがよく出たと思います。それか  
ら、昔だったらですね、泣いたらおしまいだっ  
たんですね。ところがこれでは勝敗決定  
事項にはなっていないんです。  
**アナ** 泣いても終わらないっていうこと  
ですか。泣いてもまだいじめる。  
**上原** そうです。だから、極端な言い方  
ですけど、けんかのしつぷりが女性つぼくな  
ってきている、ということですね。

**アナ** 学年的に見て、けんかについてのは  
一つの発達過程だと思っんです。大きくなっ  
てくるとやはり多少は変わってくるんです  
か。

**上原** そうですね。今の泣きの例で言いま  
すかね。3年生ぐらいでは泣いても怒られ  
ないんですよ。4年生あたりになると、泣  
いたらやめるようですね。これなんかでも昔と  
比べたら遅いと思います。それから、けんか  
には発達があるんだということとを絶対とら  
なくちゃいけないと思うことは、人間の感情  
が発達するから当然なんです。これがよく出  
ましたのね、「覚えてろ」「ざまあみやが  
れ」っていうね、この2つが出てくれたって  
いうのが新しかったですね。まあ、新しい  
とは言えないけれども。「覚えてろ」「ざま  
あみろ」っていう言葉をどのくらいから使  
っているか、お分かりになるでしょうか。「  
ざまあみろ」っていうのが早く使うのか、「  
覚えてろ」の方が早く使うのか。

**アナ** うーん、どっちでしょうねえ。「覚  
えてろ」の方でしょうか。

**上原** そうなんです。「覚えてろ」は、3  
年生あたりで多用する言葉なんです。「  
ざまあみろ」の方は5年生あたりが多く  
使っているんですよ。5年生あたりになると、  
「覚えてろ」なんていう言葉は少なくな  
ってしまいます。だから、やつぱりけんか  
について考えるのは変化するんだ、成長  
するんだって考えなくちゃいけない

んですよ。ですから、「ざまあみろ」な  
んていう言葉を1年生あたりが使ったら、  
やっぱり薄気味悪いし、違和感がありま  
すよね。ですから、このように大切な  
ものなんだって思っていたきたいな  
ということですよ。

**アナ** この調査結果は、地域的には違  
いというふうなものがあるんですか。

**上原** はい、それが見たいと思っ  
たもんです。岩手とあるのは遠野  
なんです。そこで、そのような結果  
が出やしないだろうかと  
思っただけですよ。結果としては、  
遠野といえども都会型といえる  
んですけども、ただ、遠野で  
出たっていうのはですね、兄弟  
意識ですね。都会はだいたい一  
人っ子が多いとかということ  
で、遠野に行きますと兄弟を  
何人も持つてると。長男は長  
男らしいけんかをするんじや  
ないだろうとか、末っ子は末  
っ子としてのけんかのしつぷ  
りがあるんじやないだろうか  
とか、いづれを見たらですね。  
そこが子どもの成長ですね。お  
兄ちゃんはお兄ちゃんらしく  
というのがやばりまだまだ遠  
野には残っている、ということが  
窺えましたね。長男、長女  
っていうのはあまりけんか  
しないでですね。そのけんか  
も、年齢相応のけんかをや  
っているっていうことです。  
それができてくるっていう  
ことです。つまり、兄弟だけ  
じゃなくって、おじいちゃん、  
おばあちゃんも見るとい  
うわけですし、あれはなんと  
かという

ちのなんとかちやんだよ、という形が保持されているという訳ですね。ですから、あそこの長男、跡取りだよっていう目で見られているっていうことがやっぱあるんじゃないか。

**アナ** けんかの接触の仕方や引き際なんっていうのも、やはりルールなんっていうのもできているわけなんですか。

**上原** 全部が全部とは言いませんよ。遠野といえども、都会型になりつつある、というふうに思いますからね。

**アナ** 福岡の場合はどうなんですか。

**上原** 福岡の場合もまったく変わりませんね。東京、神奈川と。例えば、九州男児の土地ですから、気性が激しいなんっていうのもどう表れているか、ということもまだまだ問題だと思えますけどね。

**アナ** 先生、今回調査なさっていささか嘔然としたこととかはありませんか。

**上原** 私は、けんかに長く関心を持ってますから、けんかの時に用いられてきた日本人の言葉っていうものを調べてみたりしたんですけどもね。「もう我慢がならない」とか「もう勘弁ならない」とか、いうことでけんかをやったんですね。でも、今回の調査の中で、今の子どもは「もう我慢がならない」とか言ってくれないんですね。極めて衝動的にやってしまうっていうことです。衝動で

すから、そこでかっこいいけんかをするとか、けんかのしつぷりがいいとか、なっていないんですね。

**アナ** ということは、小さいころからけんかはいけないというふうにしつけられて、けんかを経験しないで育ってきた結果。

**上原** そうなんです。だからけんかかっていうもので男を磨くんだとか、恥と結びつかないんですね。つまり、意気地がなくなっているんです。意気地を立てるっていうことがなくなっているっていうことですかね。

**アナ** 今の子どもたちにとつて、けんかは何になつていっているんでしょうかね。

**上原** いや、何になつていっているというよりも、けんかのイメージがなくなっているわけでしょう。

**アナ** そうすると、自分の、何かの取り合いとか言い合いになつてけんかをした場合に、このへんでこの幼稚なのをやめようとか、いじめちゃいけないという歯止めが全然なくて、どうしていいか分からないままエスカレートしてしまうということですか。

**上原** そうですね。第1ね、これが昔と今とは違うと思うんだけど、ものを取り合つてけんかをするなんっていうのは極めて幼稚なけんかだということで、昔の我々の時代はそういうけんかはしなかったんですよ。それと、日本人はけんか好きなんだっていうこと

を言いましたけども、特に歌舞伎なんっていうのはけんかから始まった芸術だと考えても、私は間違っていないと思うんですよ。粋とか、歌舞伎にすること自体、それはかっこよく見せることでしてね。粋がいい姿を見せることがお芝居であつたはずなんです。あんな文化を創つたことですら、実は日本人が生き様を美しくしていこうとしていることを、実は日本人がちゃんと知っていたからなんです。日本の文化は、ベネディクトではないけれども、恥の文化だつていうじゃないですか。その「恥」を子どもたちが獲得していく、それが日本人として成長していかなければならないことだ、と思うんですね。「火事とけんかは江戸の華」っていう。つまり、かつての日本人にとつては美意識が必要だったんです。だから、けんかのしつぷり、これは言わなければいかんと思うことはですね、それは潔いとか勇ましいとかということ、かつてはけんかをしたんです。こここのところでけんかをしなかったら、自分は勇ましくない、卑怯者だと言われてしまうということではけんかをしたんです。ところが、今の子にはそれが無いんです。今私が話したようなけんかをやってくれないんですよ。だから、意識してはいないかもしれないけれども、殺し合いのけんかだつてなりかねないんですね。それが起こるわけです。だから、見境なんてい

うものが無いんです。だから、校内暴力なん  
ていうものが起こるのは当然なんです。つ  
まり、相手が先生であろうが、けんかは美し  
くなければいけないとか、我慢しきれなくて  
やったとかいうふうな「溜め」がありません  
からね。ですから、いまはもう無茶苦茶であ  
るといふわけですね。だから、けんかはいけ  
ない、けんかはやめなさい、っていう指導ば  
かりやってしまった。つまり、大人たちが子  
どものけんかに出すぎた結果ですね、子ども  
はけんかする仕方すら分からなくなってい  
まった、ということが言えるんじゃないんで  
しょうかね。

**アナ** 私の友達の子どもが保育園に通って  
いるんですけども、その保育園で先生がけんか  
を止めないんですね。そういうことを聞く  
と、親としては非常にはらはらするんです  
ね。傷の一つもつくってるとか。ところが  
面白いもので、半年ぐらい続いていると、あ  
る日ですね、くちゃんどけんかしなくなっ  
た、っていうんですね。仲良くなったって  
いうんですね。そこで私が、けんかをするほど  
仲良くなったっていうのは、これは素晴らしい  
ことだな、って言いましてけども、そこに  
至るまでの間、例えば私がそばにいてもそこ  
まで行かなかったことがすごくあるんですよ  
ね。やはり、途中で出ないというのは、昔の親  
にとっては当たり前だったんでしょね。

**上原** 子どもを育てるっていうことが、今の  
母親たちにとっては非常に近視眼的だと思  
うんですよ。私は、教育っていうのは、待  
たなくちゃいけないんだ、子どもに十分時間  
を貸してあげなくちゃいけないんだと、そう  
いうふうに考えるんですけども。それを待た  
ないで、今おっしゃったようにですね、仲の  
いい子どもたち同士ほどけんかもやっている  
んですよ、そして、人間の付き合い方って  
いうものを獲得していくわけですね。です  
から、けんかをやったから相手のことが今ま  
で以上によく分かったわけですね。相手の気  
心が。だから、人間付き合いが上手になっ  
ていくわけです。人間の感情の動き方を次々と  
獲得していくわけです。それをさせないとい  
うことはですね。本当に子どもは可哀想だ  
っていうことですね。

**アナ** 昔の子どものけんかかっていうのは、今  
けんかしていたと思うと、もう忘れて遊ん  
だっていうのがいましたよね。今はどうなん  
ですか。

**上原** それがねえ。今度の結果ではつきりし  
たことですけども、さっぱりしたけんか  
かっていうのができなくなってきた。これは、男性  
が女性化してるんですね。だから、やっぱり  
男の子は男の子らしく育てないとですね、男  
の子が女性っぽくなってしまったのは、男  
のためにけんかをする、なんていうのは失

わけて当然なんです。それから、けんかをし  
なくなつた理由にはね、身内意識が欠如して  
きていると思うんですよ。今の日本人の生活  
の仕方自体が、身内からはなれているわけ  
ですね。親兄弟が育っている所で、子どもも育  
ているということが少なくなってきたというわ  
けですね。これは問題にしてほしいと思  
うわけです。だから、日本人が非常にけんか好き  
だったっていうことはですね、日本列島の  
中ですね、みんなは単一民族ですから兄弟の  
ようにけんかしていたって言うことが可能だ  
と考えるわけなんです。ですから、今の子  
がけんかをしないっていうのは、相手が分か  
らないっていうことなんだと思うんですよ。  
隣近所、親も知っておれば兄弟も知ってお  
れば、学校の先生も知っておる時にかえって  
けんかをするんだと思うんですよ。のびの  
びと。

**アナ** 子どもたちの間で、地域とのつながり  
が無くなってきたと言われていますけども、  
同年代の子どもたちとは遊ぶけれども、上  
の子は知らないとか、そういった縦のつながり  
が無くなったということで、子どもの遊び方  
もけんかの仕方変わってきたなんていうこ  
とも言われているんですけど。

**上原** だから、気が知れないわけですよ。  
**アナ** 子ども自身もけんかをするということ  
は、非常に、子どもから言えば、逆に危機感

というか怖いということがあるんじゃないですか。

**上原** はい、あると思います。それへもってきて、今の子どもは臆病ですからね。なんていいですか、過剰保護ですからね。

**アナ** それにどちらかというと、けんかをしないということもありますし、ぶたれたこともない、という子どももいるでしょうしね。先生、今子どもにとってけんかのできない時代、非常に危うい時代と言えるわけですね。

**上原** はい、もつとけんかをできるような環境を設定すべきだということですね。まず我々は子ども自体をどうすべきかっていうことよりも、子どもが安心してけんかができる、というような環境を用意してやらなくちゃいけないんじゃないか、ということですね。人間を育てるっていうためには、やっぱりお百姓さんと同じことで、この苗を上手に育てるためにはやはり土を耕さなくちゃ、どうにもなることじゃないんですよ。ところが今は、土はもうからからになっていて、子どもたち自身がけんかする相手がどこの子か分からないっていう、同じ学校の子だっというのにどこの子だか分からない、っていう。

これじゃあ、けんかなんかできませんよ。子どもに生活の場を与えようとするんだつたらですね、少なくとも今親たちの住んでる場所が、ここがあんたたちの故郷なんだつていう

気持ち、親がやってやることなんですね。

とりあえず共通連帯意識ですね。子どもたちが共通連帯意識を持てるような環境を設定してやる。そのためには親たちがどこの人だか知らないっていうことではなくて、みんなが

学校を中心とした顔なじみになる、そして親たちが、ここが自分たちの故郷なんだというふううに人間自体が定着していくっていうふううにしてやらないとだめだ、っていうふううに思いますね。日本人が持っている共通連帯意識の問題だつていうふううに考えなくては

いけないと思いますね。**アナ** 子どものけんかかっていうのは、一つの発達過程であつて、そんなに地域に密着しているっていう考えは私は無かつたんですけども、かなり深いものと関わっているんですね。どうも有難うございました。

NHKラジオ「ことはの十字路」  
(昭和57年)より



上原輝男先生の授業風景